

## 「(ら)れる」・「(さ)せる」の意味の関係について

岩 淵 匡

### はじめに

「(ら)れる」・「(さ)せる」は、一般に、自発・可能・受身・使役・尊敬の助動詞といわれる。しかし、現代語においては、その用例の殆どが受身・使役である<sup>1)</sup>。これは、自発や可能が、いわゆる可能動詞(「見れる」「起きれる」などの五段以外の動詞から生じたものも含む)や動詞「できる」などによってあらわされることが多い上に、尊敬も他のいい方を多く用いることなどによる。こうした現代語の状態を考慮するならば、「(ら)れる」・「(さ)せる」については、受身なり使役なりを中心に考えればよいことになる。しかし、小稿では、「(ら)れる」・「(さ)せる」の実際の用例における意味区分のむずかしさを考え、こうしたことの生じる要因について、意味相互の関係の面からとりあげてみようと思う。

### 1.

「(ら)れる」・「(さ)せる」は、文法書や国語辞書などでは、意味を区分して説明するのが普通である。しかし、古典語はもちろん、現代語においても、意味をはっきり区分して認識することのむずかしい場合が少なくない。たとえば、

どなたが来られますか。

A さんが来られます。

というような表現においては、尊敬とも可能とも考えることができる<sup>2)</sup>。また、

{子どもを泣かす。  
 {子どもを泣かせる。  
 {本を読ます。  
 {本を読ませる。

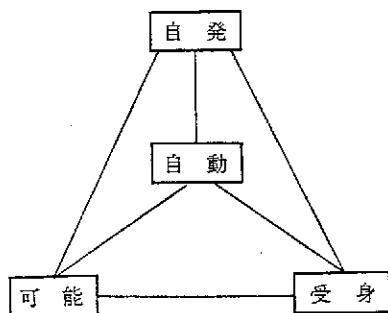
などにおいても、「～す」となるほうを他動といい、「～せる」となるほうを使役といいながらも両者の意味に区別はないと考えられる。あるとすれば、「泣く」が自動詞であり、「読む」が他動詞であるという点に関するものだけである。

このように、「(ら)れる」にも「(さ)せる」にも、意味区分のはっきりしない場合がある。これは、「(ら)れる」や「(さ)せる」のもつ本来的な性格に由来するものといわなければならない。すなわち、歴史的にみるならば、「(ら)れる」は「る」に、「(さ)せる」は「す」にさかのぼることができ、この両語はともに動詞を構成する接尾語であった。従って、この両語に各種の意味がはっきり存在していたのではなく、混然とした状態の中で「る」が自動性を、「す」が他動性をあらわしていただけである。それが奈良時代から平安時代にかけて、はっきりした意味の区分が認識されるようになり、今日に至ったにすぎない。今日、「(ら)れる」・「(さ)せる」の意味がい

く通りにも解されるのは、こうした、本来の性格を反映しているからである。

ところで、語源的な意味と、後に派生した意味との相互関係はおおよそ次のようになる。

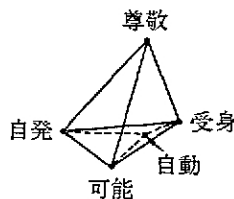
「(ら)れる」の場合は、第1図によって示すことができよう。この図では、古来から意味の区分がむずかしい場合に、それが



(第1図)

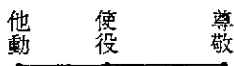
どの意味とどの意味との間に存在するかをあらわした。実線で結ばれた意味は相互に関係がある。尊敬はもっともおくれて派生した用法であるが、自発・可能・受身のいずれから生じる可能性をもつ。もし尊敬をあわせた意味相互の関係を考えるならば、吉田金彦氏が試みられたような立体図形<sup>3)</sup>によって示さなければならない。従って、第1図を底面とした三角錐なり円錐なりを考え、その頂点に尊敬をおくことになる。なお、この場合の意味の関係は、吉田氏の示されたものとは異なる。これを図に示すと第2図のようになる。意味相互の関係は、立体図

形としたため、実線と点線とで示してみた。この図も第1図と同様に、実際の意味は、二つの意味の間に結ばれた線上のどこかに存在することになり、その位置によっては意味の区分がむずかしくなる。なお、それぞれの意味は一方から他方へという一定の方向にある展開ではなく、相互にどちらもむかいうるものである。



(第2図)

「(さ)せる」の場合は、「(ら)れる」のように複雑なものではなく、それぞれの意味が一線上に配列される。たとえば、第3図に示す通りである。尊敬が、「(ら)れる」の場合とはことなり、他動からも生じると考えられるが、用例からみると使役が本源であろう。

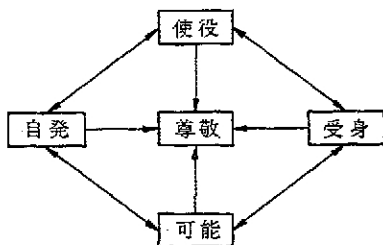


(第3図)

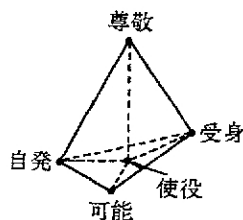
「(ら)れる」・「(さ)せる」のもつ意味相互の関係を図示してみたが(意味の派生展開の過程については諸説あるが)、本源的な意味を自動なり他動に求めるならば、こうした図示も可能となろう。

ところで、「(ら)れる」のもつ意味と「(さ)せる」のもつ意味とは一見無関係のようであるが、実際には相互に関係があるとみるべきである。その一つの例が、中世の軍記物にみられる受身の意をもった使役の表現である。<sup>4)</sup> ここには、使役と受身の表現価値の問題があるが、ともかく、両者が無関係ではないことはあきらかである。この点を考慮して、「(ら)れる」・

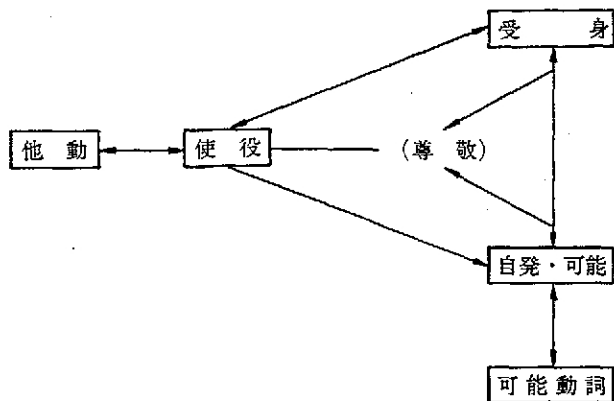
「(さ)せる」のもつ意味関係をあらわすと、第4図のようになる。<sup>5)</sup> しかし、この図では、受身と自発の関係、可能と使役の関係などを示すことができない。そこで、第2図、第3図を組み合わせて、「(ら)れる」・「(さ)せる」の意味の関係をあらわすように修正してみたのが第5図である。このように、自動もしくは他動を表示する必要がなければ、比較的簡単なものとなる。しかし、この二つの意味を加えるならば、たとえば、同じ立体図形を底面ではり合せたような形にでもすることになる。



(第4図)



(第5図)



(第6図)



以上の各図はいずれも、歴史的な面を考慮して考えたものである。もし、現代語のみについて考えるならば、もう少し手を加える必要もあるだろう。小稿においては、特に必要ではないが、たとえば、第6図のような図示の仕方でもよいであろう。

## 2.

「(ら)れる」・「(さ)せる」のもつおのおの意味の関係は、概略、第5図に示した通りである。次に、このような図示をした根拠となるものについて述べたい。

第1に本源的な意味との関係があげられる。すなわち、「(ら)れる」・「(さ)せる」の接続する動詞のもつ文法的意味との関係である。この文法的意味という、いろいろなものが考えられるが、ここでは、動詞のもつ自他について考えたい。日本語の場合は、動詞の自他を区別する必要性は少いし、更には、自他の別に立場がわかれたり、自他の別がはっきりしないものも多くみられる。<sup>6)</sup>しかし、本源的意味として自動・他動を考える以上、自他の問題は当然問題にされよう。

### (1) 接 続

すでに述べたように、「(ら)れる」は、他動詞の自動化に用い、「(さ)せる」は、自動詞の他動化に用いるのが本来の使い方である。現代語においても、こうした使い方はいくらかでもみられる。

日本の古典の翻訳を依頼されるようになった。(円地文子『妖』)<sup>7)</sup>

山のように荷を積んだ馬を無理無体に坂の上まで登らせようと、(円地文子『妖』)

などは、本来的な使い方といってよいであろう。ところが、実際には、次のようなものも少くない。

旅行中、毎日雨に降られた。

子どもに本を読ませた。

これらは、自動詞に「(ら)れる」が、他動詞に「(さ)せる」がついた例である。

日本語においては、形態上、自他の別をはっきりさせることはできない。その意味でも自他を区別する必要はない。この点では、上記の例のように、「(ら)れる」・「(さ)せる」の接続する動詞の自他は、問題にしなくともよい。しかし、「(ら)れる」が、自動詞構成語尾であり、「(さ)せる」が、他動詞構成語尾であるとすれば、あとに示した2例のような場合は生じないはずである。それにもかかわらず、こうした場合が多くみられるということは、意味の派生展開に関係があるとみななければならない。私は、旧稿において、この点に少しくふれた。<sup>8)</sup> 要約すると、次の通りである。自動性の表示としての「(ら)れる」は、使用されているうちに、種々の意味をもつようになり、それらを区別しようとした。ここに、自動性の中に、自発・可能・受身という意味の派生が認められる。その結果、自発・可能・受身の意味標識として「(ら)れる」が用いられるようになり、自動詞にも接続するようになった。「(さ)せる」も同様に、他動性の表示から進んで、他動詞にもつき、それぞれが使役の標識として用いられるようになった。

以上のように考えるならば、今日いう、受身・自発・可能は本来、自動性に包含されていたものであり、使役は、他動性の中に包含されていたものであったといえる。たとえば、

家が傾く。

家を傾ける。

において、前者は自動詞であり、いわゆる、自発、もしくは自発と可能の中間的な意味をあらわし、後者は他動詞であるとともに、今日いう使役に類した意味をもっているのである。なお、受身は自動詞の中では特殊なものとみられる。

## (2) 自動・他動との関係

自動詞は、主体自らの働きとして動作・作用を表わし、他に対して直接働きかける意味をもたない。そして、この中には、大きく分けて、自然にそうなるものと、自らそうするものがある。いいかえると、主体の意志や能力によって実現するものと、主体の意志や能力とは無関係に実現する

ものがある。そして、さらに、外的条件が動作・作用の実現に関与するものさえある。たとえば、

部屋の中を歩く。

木の葉の動くのが見える。

家が傾く。

などである。こうしてみると、これらの例では、自発や可能に一致する場合があることは明らかである。

他動詞は、主語(主体)の他に対する働きかけとして動作・作用を表わすもので、他に直接働きかける意味を強くもつ。そして、中には、第三者に対して動作・作用を強制する形のものも含まれる。特に後者は、いわゆる使役の典型とされる場合である。たとえば、

子どもを使いに行かした。

駅員が警官に乱入者をつれて行かした。

などの場合である。「行かす」は、「行く」に対するものとしては他動詞となり、意味的には、単なる他動ではなく使役ということになる。

以上のように、自動には、自発・可能の意が、他動には使役の意が含まれている。これが、結局、さきに述べた、意味表示の標識的な使い方をされた結果、種々のものに、接続するようになったとみられる。

### 3.

自発以下の意味は、いずれも、自動もしくは他動の中に包含されていたわけである。そして、これらが、自動、他動の中から特に意識された時に、自発以下の意味をはっきりあらわしてくることになる。ここに、意味がいまいになる第2の要因が存在する。個々の意味は、本来は未分化の状態であるが、表現価値の上から特に意識された意味が強調された時に、自発以下の意味が識別できるようになる。従って、それぞれの意味は、独立しているものではなく、連続しており、極端な場合にのみ、個々の意味が明確に認識される。この意味の連続の面から意味相互の関係をとりあげてみる。

### (1) 自発と可能

自発と可能とは、主体の意志や能力が存在するか否かという点で区別される。しかし、外的条件に基づき、主体の意志や能力が働き、動作・作用が実現する場合もある。そこで、自発と考えられる意味をもつものと、可能と考えられるものについて、意味を細分してみることによって、両者の連続が示されよう。

自発と考えられるものは、およそ次の三つに分けられる。

- a. 主体の意志や能力とは全く無関係に自然に行なわれることをあらわす。
- b. 外的条件によって動作・作用が行なわれることをあらわす。
- c. 表現をやわらげるために用いる(婉曲)。

実際には、a と b とを区別することはむずかしい。多くの例は、このどちらとも考えられる。たとえば、

なんとなくはだ寒さの感じられる朝でした。(『現代語の助詞・助動詞』)  
日本人の駄目さが絶望的に感じられた。(中野重治『五勺の酒』)  
赤いネオンも、おひおひ 近づく海の予告の標識のやうに眺められた。  
(三島由紀夫『橋づくし』)

などが、a および b に該当しよう。c は、受身とも考えられるもので、

神武天皇の大和平定伝説には、継体の事跡が多く影をおとしていると  
思われる。(直木孝次郎『奈良』<sup>9)</sup>)

のように、主体の思考・判断の主観性をさけ、断定しないような表現となったものである。

自発においては、主体と主語とが一致することはないが、可能になると、この両者が一致する場合もでてくる。可能への連続は、自発の b による。ここからさらに進むと、主体の意志能力によって動作・作用が可能となる意味に至る。意味の強調が主体の明確な表示となる結果であろう。

可能は、およそ次のような意味をもつ。

- a. 主体の意志・能力によって動作・作用が可能となることを表わす。

- b. 外的条件によって許可・許容されることをあらわす。
- c. 外的条件によって、動作・作用が実現することを表わす。
- d. 可能から転じて、能力・価値などを評価することをあらわす。

このうち、c は自発の b と区別がなくなると同時に、一般には主体と主語とが一致しない。主体と主語の一致は a に多くあらわれる。また、b は受身の表現と類似する点を持ち、受身との関係は、a よりもこの b にみられると思われる。なお、それぞれの例を示すと次の通りである。

a の例 重苦しくて、ほかのことを考えられないんだ。(武田泰淳『寝のすえ』)

b の例 試験は誰でも受けられます。

c の例 背泳ぎには、優勝の期待がかけられる。(『日本文法大辞典』)

d の例 言うに言われぬ苦勞をした。

以上のように、自発と可能とをあわせみると、自発の b と可能の c とを接点にして両者の意味はつながることになる。いいかえると、両者を区別することは、本来無理なものかもしれない。動作・作用の生ずる要因の面からこの両者の関係をみると次のようになろう。

	主語と主 体の関係	主体の意志 能力との関係	外的条件 との関係	
自 発 ↑	一致しない	な し	な し	(自 然)
	一致しない	な し	あ り	(実現性)
		な し	あ り	(許 可)
↓ 可 能		あ り	あ り	
	一致する	あ り	な し	(可能性)

この表はごくおおまかなもので実際にはもっと複雑なものになろう。主体の意志・能力の存在によって動作・作用が実現するわけであるから、主体の意志・能力の生ずる要因の所在という点から示してある。

## (2) 可能と受身

受身は外的条件の制約を受ける。この点では、可能の b と共通する。主

語と主体とは、受身では一致しないが、可能性の表現，すなわち，可能における極端な場合には両者が一致する。

受身は，およそ次のような意味をもつ。

- a. 主語に利害が及ぶことをあらわす。
- b. いわゆる非情の受身。
- c. 客観的叙述に用いる受身。

c は b より派生したというよりも，b の一部と考えるべきかもしれない。いずれにしても主語が動詞の表わす動作の影響を受けることになる。そして，この強いものが，一般に a として用いられ，非常に弱くなったものが c となり自発に通ずる。

受身のおのおの例としては次のようなものがあげられる。

a の例 賈物を売りつけたことが問題になって危く MP に踏み込まれそうになった。(円地文子『妖』)

b の例 私の椅子と直角に置かれた椅子。(吉行淳之介『不意の出来事』)

c の例 児童は，人として尊ばれる。(『児童憲章』)

a には常に利害の感情が，b には a，c とは異なり客観的な叙述がみられる。b と c とでは，c は，主体が，ばくぜんとした多数をあらわすものである点で異なる。

以上を通してみると，利害感情という外的条件によって，動作・作用が制約を受ける日本語本来の用法に，可能との類似性をみることになる。この両者の関係は次のようにあらわすことができる。

	主語と主体の関係	主体の意志能力との関係	外的条件との関係	
可能	一致する	あり	なし	(可能性)
↕		あり	あり	
受身	一致しない	なし	あり	(許可・許容)
↕		あり	あり	(利害の受身)
自発	一致しない	なし	あり	(非情の受身)
↕		なし	なし	(自然)

### (3) 受身と自発

受身の b, c は明治以降発達したものであるが、特に c は、主体が一般的なものとなって、客観的叙述に非常に便利なものとなり、多用されるようになったのであろう。この c には、主体の主観的な判断が含まれないので、自発の a, b, c と区別がつかない、いいかえると、この点で受身と自発とがつながるとみられる。歴史的には受身の b, c は、古くからみられるが用例が少く、c がもっとも遅く派生したものである。

### (4) 他動と使役

使役は、動詞の未然形に「(さ)せる」を接続させたと分析されるものに対していわれる。従って、意味的には同じでも、他動詞とよばれる語形もあるし、使役だといわれる場合もある。たとえば、

{ 泣か・す	{ 読ま・す
{ 泣か・せる	{ 読ま・せる

において、「泣かす」「読ます」を他動詞とし、「泣かせる」「読ませる」を特に使役とする。しかし、意味的な面からこれらを区別するとなるとむずかしい。たとえば、「頸を傾ける」という表現があったとすると、これは、「子どもを泣かす」と同様のいい方ということができる。さらに、「子どもを泣かす」と「子どもを泣かせる」とも同じである。しかし、「本を読ます」となると、「頸を傾ける」とはやや様子が異なる。すなわち、この表現は、

A ガ B ニ本ヲ読ませる

となる。「頸を傾ける」や「子どもを泣かす」は、どちらも

A ガ頸を傾ける

A ガ子どもを泣かす

というふうになる。こうすると、「読ます」と「読ませる」との区別はないから、「泣かす」と「読ます」、「泣かせる」と「読ませる」とは異なることになる。すなわち、いわゆる他動詞に対して「(さ)せる」を接続させたものが使役といわれることになる。しかし、

### 車を走らせる

においては、「泣かせる」とはいささか意味に差があり、使役性が強いように思われる。そこで、使役の「(さ)せる」を接続させたと一般に考えられる場合の意味を整理すると次のようになる。

- a. 他に動作を行なうことを強制・命令することをあらわす。
- b. 他に動作を行なうことを許可・許容することをあらわす。
- c. 他の行なう動作を放任することをあらわす。
- d. 他の行なう動作をとどめることができないことをあらわす。不本意迷惑などをあらわす。
- e. 他の行なう動作が実現するようにすることをあらわす。この中には、身体の一部の動作が行なわれることをあらわすものも含められよう。

このうち、a が本来の使役であり、e は単に他動性を示すものと考えてよい。すなわち、他動は、主語の客体に対する動作・作用の働きかけであるから、その中で他に対する働きかけの強弱が、いいかえると、働きかける相手が明確であるか否かが、使役と他動を分ける一つのよりどころとなる。使役は、他に対して、動作を行なうことを強く要求するものだからである。なお、それぞれの例を示す。

- a の例 客は仙吉を待たせて中へ入って行った。(志賀直哉『小僧の神様』<sup>10)</sup>)
- b の例 夫が話し終ると、さり気なく、その種の告白を切り上げさせたのである。(庄野潤三『プールサイド小景』)
- c の例 啓作はドミノにだけ喋らせて黙っていたが、(円地文子『妖』)
- d の例 私が東京へ出ていたら朋子のお母様のこと、みすみす死なせはしなかったわ。(『現代語の助詞助動詞』)
- e の例 まごついた経験をユーモラスに語って笑わせる。(『外国学生用日本語教科書 中級』<sup>11)</sup>)



足を滑らせ、ひどく不様な恰好で倒れた。(大江健三郎『死者の奢り』)

これらをみると、e は、自発に近い面もあわせもち、無意志的な動作もあらわすことはあきらかである。が、同時に、主語の対象に対する働きかけとして動作作用がおこなわれているものでもあろう。

使役の場合は、一般に次のようになる。

{客が仙吉に強制(命令)する。  
仙吉は客を待つ。

さきに示した a の例は、上記のように分解して考えることができる。すなわち、この二つの文をまとめて、

客は仙吉を待たせる。

という一つの文にしたと考えれば、他動+他動という二重他動になる。従って、他動から使役に至るまでは、いずれも他動であり、その特に表現が強調され、主体と客体とが明確にされた時に使役という二重他動を生ずる。この結果、主体の意志はかえりみられないことになり、主語と主体とは一致しないことになる。

この関係をまとめるならば、下の表のようになる。

	主語と主体の関係	主体の意志能力との関係	外的条件との関係	
他 動	一 致	あ り	あ り	
使 役	不 一致	ほとんどなし	あ り	(強 制)
	不 一致	ほとんどなし	あ り	(許 容)
	不 一致	な し	あ り	(放 任)
	一致することあり	な し	あ り	(迷 惑)
	一致することあり	な し	あ り	(誘 発)
自 発	不 一致	な し	な し	(自 然)

## (5) 尊敬の派生

現代語においては用法がかぎられることが多い。特に「(さ)せる」は

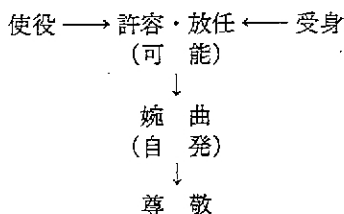
「(さ)せられる」「(さ)せ給う」という形で用いるのが一般的である。

尊敬は、当然、主語と主体とが一致する。従って、この両者が一致しない意味から直接に尊敬が派生することは考えられない。その意味では、可能なり他動なりがもっとも近い。しかし、用例を史的な面から検討すると、尊敬と自発、尊敬と可能、尊敬と受身、尊敬と使役のいずれの場合にも意味の判定のつかない例がみられる。そうだとすれば、やはり、どの意味にも尊敬を派生させる可能性を認めないわけにはいかない。

「(ら)れる」の場合は、それぞれの意味を弱めた場合に派生するとみられる。意味を弱めることにより、間接的な表現となり、すべてにつけてあいまいなものとなる。間接的な表現が、他者の動作をうやまう表現として用いられたものであろう。

一方、「(さ)せる」の場合は<sup>12)</sup>、直接の行為ではなく、他者を使うことによって、自らの行為の代理をさせたところから生じたものであろう。そこで、使役をすることに尊敬の意をあらわす語を加え、ついで、全体が尊敬をあらわしたところから、「(さ)せる」に尊敬の意が加わったとみなされたのであろう。その結果、使役の対象を明確にしない表現となり、あいまいな、間接的な表現となった。

いずれの場合も、貴人の動作を間接的に表現することによって尊敬の意を生じさせたと考えられる。間接的な表現は、遠まわしな、婉曲的な、主観的判断の少ないものである。そこで、尊敬の派生は次のような過程をへたとみることができよう。



#### 4.

代表的な意味での受身と使役とは、相互に関連がある。たとえば、次の

例によってみてもおおよそ想像されよう。

- a { 彼のあわてふためく様子を想像させる。  
彼のあわてふためく様子が想像される。
- b { 試験を受けさせない。  
試験が受けられない。
- c { 子どもを死なせる。  
子どもに死なれる。

a においては、それぞれ非情の使役であり、非情の受身である。さらに、非情の受身は自発と考えてもよい。b は、許可あるいは許容を表現する。従って、使役と可能との対応関係ということが出来る。c は、迷惑・不本意をあらわす表現に対して、利害の受身である。このような対応関係は、表現価値の上から選択されるものであるが、受身と使役とが全く無関係に存在するものではないことを示している。いわゆる表裏一体の関係にあるわけである。

なお、「(ら)れる」・「(さ)せる」を意味上から対応させるならば、次のようになろう。

	(ら)れる	(さ)せる
1	自動詞構成語尾	他動詞構成語尾
2	自然 婉曲 外的条件の結果	無意志的動作の実現  放任
	許可・許容 可能性(能力)	許可・許容 強制・命令
3	利害の受身 非情の受身 客観性の表現	不随意・迷惑 非情の使役
4	尊敬	尊敬

これは、意味の派生展開の順を示したものではないが、おおよそその傾向は汲みとれよう。そして、それは同時に「(ら)れる」と「(さ)せる」との

意味の対応をあらわしているといつてよい。

注

- 1) 具体的な数字で示したものとしては、吉田金彦氏の『現代語助動詞の史的研究』(昭46, 明治書院)がある。
- 2) 松村明氏編の『日本文法大辞典』(昭46, 明治書院)中の「れる」「られる」の項や、注1文献などにも同様に指摘がある。
- 3) 注1文献122ページ。
- 4) 1972年度日本教育公開講座レジュメ5ページおよび、『品詞別日本文法講座』第八卷(昭47, 明治書院)所収、拙稿「受身・可能・自発・使役・尊敬の助動詞」157ページ参照。
- 5) 1972年度日本教育公開講座レジュメ4ページおよび、注4拙稿163ページ。レジュメに示したものを一部修正し引用した。
- 6) 国立国語研究所資料集『動詞・形容詞問題語用例集』(昭46, 秀英出版)162ページ以下に具体例が示されている。
- 7) 毎日新聞社刊行の『日本の短篇』(上下2冊, 昭44)による。以下、小説からの引用は特に記さないかぎり、これと同じ。
- 8) 注4文献中、『品詞別日本文法講座』第8巻所収のもの。
- 9) 岩波新書。昭46刊。
- 10) 新潮文庫による。(現代表記化)
- 11) 早稲田大学語学教育研究所編。
- 12) 注4文献参照。